
闇の使者と七つの唄

門矢光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の使者と七つの唄

【Nコード】

N1401Z

【作者名】

門矢光

【あらすじ】

此は朔夜の過去の話。ある時、違法チート転生者がある世界で暴れているためそいつを倒すためにある世界に飛ばされるとルークになっていた。無事に世界を救えるのか？この話は過去なので烏がまともで色んなキャラ冷たいです

1 (前書き)

一話目

「は、七年か……………とうとう始まるなガイ」

「そうだなルーク。それより驚かないのか？俺の家がテントから小屋に変わったのに」

「今更驚かないよ」

俺、ルーク改めて朔夜はガイ改めて烏とそんな話をしていた。俺は違法チート転生者がこの世界に紛れ込んだらしく、七年前にルーク（レプリカ）と融合した。烏はルークの暗殺計画を企んでいた事がばれて殺されたガイと融合した。そんなこんなで退屈な生活を送っているわけですよ。

「ルークさま」

ドアの方からメイドの声が聞こえた。すると烏は窓から飛び降りる準備をして、

「ルーク、また後でな」

烏はそのまま飛び降りた。相変わらず他人とは関わりをとらないようにしてるのかよ。まあ俺がとやかく言っても仕方ないか。

「あいてるよ。」

「失礼します。旦那様がお呼びです。応接間まで来てくださいませ」

親父が呼んでるか……………ヴァンのことか……………どうでも良いか。

「ありがとう」

俺はメイドにお礼を言ってから重い足取りで応接間に向かった。うわ会いたくないな……………

「失礼します」

俺は挨拶してから応接間の扉を開けて入る。そこにはファブレ夫妻にヴァンが居た。俺は空いてる椅子に座る。

「父上、用件は何でしょうか？」

矢張ヴァンがイオンを探しに数日居なくなる話だった。まあ俺も居なくなるんだけどさ

「今日は何時以上に剣術の稽古を見てやるぞルーク。」

「ワーウレシイナヴァンセンサーオレガンバルヨ（棒読み）」

俺は棒読みでそう言ってさっさと応接間を後にした。さてタタル溪谷に飛ばされてもいいように準備をするか。まずは金だな。後は寶石此があれば金には困らない。後はグミにライフボトルにエリクサーに仕込み刀だな。俺はそれらを持って中庭に向かう。中庭にはヴァンと鳥が既に居た。鳥はただヴァンの話に相づちを入れているだけだった。もう少しはまともに話そうよ。

「総長殿時間が惜しいので私は此で失礼します。」

鳥はすたすたと近づいてきた。鳥は俺の耳元で

「やり過ぎるなよルーク」

「わかったよ」

ガイはベンチに座り、本を読み始めた。俺は木刀（仕込み刀）を取り出して

「行くぜ！」

「こい！ルーク！」

・
・
・
・

「どついたらこうなる。」

「普通にやった。」

俺は鳥の説教を喰らってます。まあ少しやり過ぎたか

「ルーク、何処が普通だ。開始直後に木刀を吹き飛ばし、更に蹴りでヴァンの利き足を折るのはやりすぎだ！」

「ガイ、大丈夫、大丈夫。どこぞのガンダムパイロットとみたいに無理矢理くっ付けるから。ただし痛みは半端ないらしいがな。」

「普通は治らないぞ」

「気力だ！」

俺は胸を張りながらそう言った。鳥は額を押さえながら念話で

（朔夜、来るぞ。）

（なら、ふらついてるよ）

（わかっている）

「く、譜歌か！」

うわ！大根役者だ！もう少しまともな演技出来るだろ！

「ヴァンデスデルカ！覚悟！」

俺的には殺してもいいんだけど助けるか。

「はあああああ！」

俺は仕込み刀を引き抜き攻撃を受け止めた。すると空間が歪みだした。超振動か……………まあいいがな

「まさか！」

「うわあああああ！」

ヴァンが叫んだが俺たちは既に飛ばされていた。

「つつ！此処は……………タタル溪谷か……………」

俺は起き上がり周りを見ながらそう呟く。俺の都なりにはティアが気絶していた。外傷は見当たらない。多分無事だろう。寝顔可愛いな。ってそんなことはどうでもいい！取りあえず起こさないと！

「おい！起きろ！えー、起きてくれ！」

俺はティアの身体を揺すりながらそう言つと

「うう、此処は……………あなた無事なのね！」

ティアが呻き声をあげながら身体を起こした。

「ああ、さてと、何処かに飛ばされたみたいだな。あつ！俺はルークだ。ルーク・フォン・ファブレ。君は？」

「ティアよ。」

「ティアね。ティアは此処が何処だかわかるか？」

俺は取りあえず質問した。まあ相手も此処が何処だか知らないこと知っていながらだがな。

「解らないわ。」

「そつ……………つっ！」

俺はティアを引き寄せ仕込み刀を引き抜き、構える。

（なんだろう。急に胸がドキドキしはじめて顔が熱いわ。更にルークの真剣な目がかっこいい……………って何を考えてるの私！この動きただ者じゃないわ！）

何だ？何でティアは顔を赤くしてるんだ？俺は前方を見ると……………

……………

「なんだあれ！ライガ？いやどっからどう見てもアンリマユに取り付かれてるようわからない奴だし、でもライガにも見えるし……………あれは絶対この世界のものじゃないだろ！」

「ルーク？何を言っているの？」

「悪い。ちよと取り乱した。ティアは下がっててくれ」

俺はティアを放してアンリライガ（命名俺）に近づき、一太刀浴びせた。更に回し蹴りを放つ。アンリライガはそれを避けて雷を放ってきた。俺はバックステップで避けて

「魔神拳！魔神拳！」

俺は二発魔神拳を放つ。すると俺は何かを閃いた。此は面白くないか？

「魔神拳・連牙！」

俺は無数の魔神拳を放つ。お！結構喰らってるじゃん！なら、

「おら！双牙斬！」

俺はアンリライガを真つ二つに斬ろうとするが、斬れなかった。ちっ！駄目か、威力が足りない。アンリライガが黒い槍みたいのを飛ばしてきた。ヤバイ！避けられない！俺は直にそれを喰う。

「ルーク！」

「大丈夫だ！」

俺は立ち上がるが少しふらついた。すると後から譜術の詠唱が聞こえた。

「ファーストエイド」

俺の身体の傷は癒えた。暖かいなこの術

「サンキューな」

俺はアンリライガに近づき仕込み刀を構えて

「はあああああああああ！」

頭に思いつきり突き刺した。するとアンリライガは悲鳴をあげてドロドロと溶けていった。やはり、アンリマユか……………まさか転生者が！彼奴は何が目的なんだよ。

転生者サイド

何故ルークが仕込み刀なんか使ってるんだよ！つつか性格おかしいだろ！何で最初から魔神拳なんか使ってるんだよ！可笑しすぎだろ！ぜってえ殺して俺のハーレム作ってやるからな！

1 (後書き)

次回も読んでくださると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1401z/>

闇の使者と七つの唄

2011年12月4日23時46分発行